私の改革論 荒波に挑むトップ NO.5

大阪経済大学・学長
徳永 光俊

人口減少社会の新たな価値創造を担う若者を送り出すための教育改革に挑む

私の視点 ― 課題をこう捉える ―

大学教育改革には大局的な視点が不可欠

大学教育の方向性を考えるうえでまず忘れてはならないのが、日本社会の将来の姿です。2004年12月に1億2784万人でピークを迎えた日本の人口は、急速に減少を続けています。国立社会保障・人口問題研究所によれば、2050年に約9700万人、2100年には5000万人を下回ると推計されています。今の18歳が55歳前後になる頃には、現在より3割も人口が少ない社会になっているわけです。

人類史的に見ると、世界は大きな転換期にあります。千葉大学の広井良典教授は、『人口減少社会という希望』で、産業化社会の成熟・定常化を迎えた時代が現在であり、「成長」に代わる新たな価値観の創造、地球規模の倫理が求められると説いています。私はその考え方に賛同します。現代の若者は、新しい価値観の創造が求められる時代を生きるのです。

大学教育の改革は、こうした変化を直視し、将来の社会で主人公になる若者に何を教えるべきかという発想から出発すべきです。しかし、多くの改革の方策は、既存の課題の延長線で考えられているように思います。例えば、20年後のことを考えるなら、喫緊の課題として取り上げられることの多いグローバル化への対応は大きな問題になっておらず、むしろ日本固有の文化や考え方を世界に発信し、新しい価値観の創造に貢献するという課題に向き合っているのではないでしょうか。

現代に必要な知識を超え未来を創造できる力を

大学改革の舵取りを担っているのは、私も含めて高度経済成長期の社会を生きてきた人々、いわばモノの時代の価値観に絡め取られている人々です。従来と異なる社会が出現することに気づいてはいても、古い価値観に捉われ、どのような社会になるのかは、見通しにくいものです。

しかし、過去の残滓が現在に感じ取れるように、未来もまた現在に封じ込められているはずです。未来を創り出すのは、生まれたときからコンピュータや情報ネットワークに慣れ親しんできた、私たち大人とはまったく異なる感性を持つ若者です。未来はそうした若者たちの中に存在しているのです。

大学教育が担うべきは、現代に必要とされる個別の知識や技術を修得させることだけではなく、未来の創造に向けた新たな胎動を後押しし、その開発を助けることであるべきです。

お仕着せではない教育プログラムの創造を

私の大学教育に対する考え方は、私自身の専門分野である農業史の研究にもつながる部分があります。教育と農業は、いずれも「いのち」を育てるものです。新しい農業が、土地や作物と真摯に向き合う農家の実践の中からしか誕生しないように、まっすぐに学生と向き合うことからしか、次の時代の大学教育のあり方は見いだせません。

「いのち」を育てるには時間がかかります。「そっと手を添え、じっと待つ」という精神が必要です。教職員は常に学生の視点で考え、学生とつながり、彼らの中から芽生えてくるものをキャッチして、教育に結び付けていくことが必要なのです。学長の役割とは、そうした種をまき、発芽と成長を見守ることだと思っています。

自学の学生と向き合い、お仕着せではない、個性・特色を持つ独自の教育プログラムを創造すること以外に、個々の大学の発展はありません。それは生き残りをかけた競争ではなく、大学同士の共存共栄をめざす道になるはずです。

本学は、人文・社会科学系の大学として歴史を重ねてきましたが、この分野の学問のあり方そのものが転換点に差しかかっています。もっと人間の生命や生活に目を向け、共存共栄の社会を構築するための学問世界を創造していく必要があると考えています。

大阪経済大学の改革

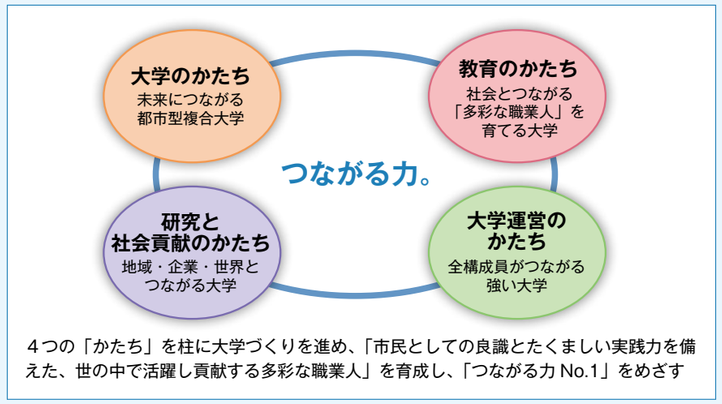
さまざまなつながりと3つの特色を強化

学長就任以来、「ゼミの大経大」「マナーの大経大」「就職の大経大」という個性・特色の強化と浸透に努めてきました。学生、教職員、企業、地域の人々相互のつながりを深め、それぞれの関係の中で生み出されるものを教育に結び付けていくことが目的で、いずれも成果が表れ始めています。

学生と向き合うには、大教室での講義よりもゼミ形式の少人数の授業が適しています。そのため、1年次からの基礎ゼミをはじめとする演習科目を充実させています。また、ゼミでの研究内容とプレゼンテーションの力を競い合う「ZEMI－1 グランプリ」という正課外の行事を毎年開催しています。企業からも審査員を迎えて、ゼミ重視の教育成果を学内外に訴えてきました。その結果、必修でないにもかかわらず、学生のゼミ参加率は95％以上に達し、企業からは「ゼミの大経大」に対して高い評価が得られるなど、認知が進んでいます。学外の大学対抗ゼミ大会でも優秀な成績を収めるゼミが続出し、学生の自信を生んでいます。

マナーについては、あいさつができ

■ 2018年度に向けたグランドデザイン



4つの「かたち」を柱に大学づくりを進め、「市民としての良識とたくましい実践力を備えた、世の中で活躍し貢献する多彩な職業人」を育成し、「つながる力 No.1」をめざす

る学生を育てています。社会人基礎力のベースはあいさつにあると思っています。加えて、毎年４月と10月の各１か月間、学内外の清掃活動を行う「マナーアップキャンペーン」を実施しており、各回延べ1000人もの学生が参加するまでに定着しています。

就職に関しては、2014年６月に日経HRが公表した「人事が選ぶ大学ランキング」において、「就職支援に熱心に取り組んでいる大学」の６位に選ばれました。キャリア教育科目の拡充や、年間延べ１万回もの個別就職相談の実施など、きめ細かな支援の積み重ねが評価されたのだと思います。

入試難易度を超えた“No.1”をめざす

2032年の創立100周年までに「経済・経営系の私立大学No.1」をめざすという新たな目標を設定しています。そのステップとして、次の３つの“No.1”を順次、実現するつもりです。これらの取り組みは、入試難易度を超えた指標づくりの試みでもあります。

１つ目は「つながり度No.1」で、グランドデザインに掲げている「つながる力」の強化に努めます。多くの人々とのつながりを充実させ、その関係の中から、教育、大学運営、研究と社会貢献、さらに大学そのものの「かたち」を見いだし、創造する方針です。

２つ目は「満足度No.1」です。学生に多くの仲間、人々とのつながりを実感してもらう機会を数多く設け、「大経大生でよかった」と思ってもらいたいのです。教職員にとっても、職場としての満足度No.1をめざします。

３つ目は「達成度No.1」で、クラブ活動、ゼミ活動、就職支援、教員の研究など、いずれも今のポジションに甘んじることなくトップをめざしてもらいたい。外部からの客観的・数量的な評価に基づいて“No.1”をめざす学風づくりを進めていくつもりです。

トップの横顔に迫る

研究者として

文学や哲学を志しましたが、父親に反対され、妥協の末に農業工学科へ進みました。しかし、肌に合わず農林経済学科に転学科し、農業史に出会いました。

大学院生時代から現在に至るまでの37年間、「関西農業史研究会」の活動を続けています。そこで三橋時雄先生、飯沼二郎先生、岡光夫先生をはじめ、あらゆる分野の研究者に出会えたことが大きな財産です。

「奈良盆地の農業史」「江戸時代の農書」の研究ではトップクラスの評価を得ることができました。残る人生で「日本農学原論」および「比較農法史」を書き上げるつもりです。

教育者として

現在も講義やゼミを続けています。学生目線の現場感覚を失うことに不安があり、過去の経験に縛られないよう、常に自らを戒めています。

私が学生に４年間考え続けてほしいのは、黒正巌初代学長が残した「道理は天地を貫く」という言葉の意味です。本学にしかないこの言葉を、自分なりに語れる人間になって卒業してほしいと思っています。

私の好きな言葉

尊敬するリーダーは特にいません。リーダー論にも関心がなく、こだわりや硬直性を持ちたくないと思っています。拠りどころとする言葉を強いて挙げるなら、2014年３月に89歳で亡くなった母の「おかげさま」です。この和語に象徴される感謝の気持ちが、学内外、日本の内外に沁みだしていけばいい、そのような大学運営をしたいと思っています。

1983年の関西農業研究会の懇親会での徳永氏（中央）。尊敬する研究者の一人、岡光夫先生（右端）と。

黒正巌初代学長の言葉を刻んだ石碑。直系の孫弟子としてその精神を学生に伝えている。

とくなが・みつとし● 1952年愛媛県生まれ。1975年京都大学農学部農林経済学科卒業、1980年同大学院農学研究科農林経済学専攻後期博士課程単位修得満了。1985年大阪経済大学経済学部専任講師、1990年助教授、1997年教授、2010年から現職。関西農業史研究会主宰、プロジェクト「いのち」共同主宰。専門は農業史。博士（農学）。主著は『日本農法の水脈ー作りまわしと作りならしー』『黒正巌と日本経済学』（編著）など多数。